

言いたいことを言って、伝えたいことを伝えて、みんながそうなればいいなと思う

ゲスト 西片 明人 ライブサウンドエンジニア／東北ライブハウス大作戦・代表

聞き手：Misao Redwolf（首都圏反原発連合）



刷り込まれた光景

Misao 東日本大震災が起きた2011年3月11日のことをおしえてください。

西片 仕事で下北沢のシェルターというライブハウスにいて、搬入が済んでリハーサルをやるかという時に地震が起きました。コンビニにいて、自宅にいた家内と電話で話してた時に一気にガツンと揺れがきました。棚の商品がバカバカ落ちてきてましたね。帰宅して家族と顔を合わせて無事を確認できましたが、東北の仲間にも連絡をしました。

Misao そのときはまだ、福島の原発についての意識はなかったのでしょうか？

西片 原発のことは全然直結しなかったですね。爆発してからも暫くは「そういえば」という感じでした。というのは、原発について無知だったんですよ。それから少し時間を置いてから「どうなるんだろう」と思うようになって、漠然と怖いと思いましたね。原発についての知識がないので、自分の思考回路が働かなかったんです。

ぼくが20代前半のころはアトミックカフェとかロフトでよくやっていたのに、全然ピンとこなかったんです。言っていることは分かるんですが、結びつかなかったですね。3.11以降、原発事故にリアルタイムで直面して、やっと繋がってきたという感覚がありました。あの頃にもっと学べばよかったな、とすごく思ったりします。

震災から何日か経っていく中で、自粛、自粛でライブイベントがどんどん

中止になって仕事ができない状況になっていく中で、TOSHI-LOWたちが東北に送る物資を集めはじめていたので、一緒に事務所に詰めて荷さばきなどをやっていました。支援物資の活動のほかには、ワンコインライブをやるために東北に行きました。

それで4月11日に盛岡に行つたんですが、ライブの翌日に宮古と大槌に行くことができて、そこで仲間の安否を直に確認できました。彼らが車を出してアテンドしてくれましたが、震災の1か月後で地獄みたいな状況で。被災地の光景が刷り込まれたのは、その後の自分の動き方にすごく大きな影響があったと思います。

『東北ライブハウス大作戦』起動

Misao そういう動きが、『東北ライブハウス大作戦』につながっていくと思うんですが、きっかけをおしえていただけますか？

西片 それもTOSHI-LOWでしたね。4月の末頃に2人で話をした時に、「いつまで金魚のフンみたいにくっついてきているんだ。なにもしないつもりか」というようなことを言われたんです。その時はケンカみたいな感じになってしまったし、悔しかったですね。

Misao TOSHI-LOWさんは西片さんを買ってから、尻を叩いてきたんですね。

西片 BRAHMANと支援活動をしながら、インプットはできているのにアウトプットできていない。被災地に物資を運ぶこともアウトプットではあると思うんですが、ぼくにとってはそうではなくて消化不良を起こしていました。

4月11日に刷り込まれたことが大きかったと言いましたが、そのとき仮設住宅や遺体安置所まで行ったんですね。そこは自分の意志とは関係なく、強制的に集めさせられた場所なんですね。その刷り込まれていた光景、その点と線が結びついた感覚になって、ライブハウスを作ろうと思ったんですね。そのときのことはよく覚えています。

6月にパワーストックというイベントのため、ボコボコの東北道で宮古に向かう朝方、ちょうど朝日が昇るときに、「ライブハウスを作ろう」とポコッと落ちてきました。被災地に、自分の意志で足を運べ、集まる場所を。それはぼくにとっては自分がずっと育ってきたライブハウスだったんで、ライブハウスを作ろうという答えが出たんですよね。

切羽詰まったときは、自分の経験や積み上げてきたものしか信用できないのかなと思いましたね。混乱の中では、自分の足元にあることが見つけられないものなんだな、と。消化不良の時期が長かったのか短かったのかは

Walk and Talk it

財界の閉じた世界を見せつけられた不快が残るばかり——映画『金環蝕』



保守政党の総裁選挙を端に発した汚職事件を描いた山本薩夫監督の映画『金環蝕』(1975年)で政治家、電気事業者、記者等が登場するが、「民衆」、「私たち」について語られることはごく僅かだ。法務大臣(大滝秀治)が検事総長(加藤嘉)に対してこういう。【摘発すべきものはどんどんやらなければなりません。しかし、角を矯めて果になったら大問題だ。政治に対する民衆の不信感ってやつですな】。このように前総理の罪を問うことを牽制する場面で「民衆」が持ち出されるくらいである。

9/27、関西電力岩根社長は八木会長ら20人が7年

間に高浜町元助役から計3億2千万円分の金品を受け取っていたことを発表した。その反応として奇妙だったのは、経団連中西会長が「八木さんも岩根さんもお友達で悪口もいえないしいこともいえない」と語ったことだった。罪を問うのは「悪口」ではないし、「お友達」を強調されても私たちは「お友達」の輪の中にいない。財界の閉じた世界を見せつけられた不快が残るばかりだ。この「収賄問題」が明るみに出たのは政府の隠蔽体質を考えると幸運だったという気さえしてくるのだが、このまま業務上背任に問われることなく過ぎていくなら、法治国家としてはよいよ終りを迎ってしまう。(TH)

分かりませんけど、自分の中での答えが素直に出た感じがあったんですね。

で、その日のライブが終わってすぐ、現地の仲間に打診したら「やろう！」と二つ返事で。そのあと大船渡に炊き出しに行く道中で思いついて、大船渡の仲間にも、一緒にライブハウスをやらないかという打診をしたんですよ。宮古でスイッチが力ちっこく入っちゃって、グワーッと回りだしたんですね。

その2ヵ月後、知人に「石巻にライブハウスを作りたいという人たちがいるんだけど、話を聞いてやって」と言われて会いに行きました。その後、石巻も二転三転しましたが、あとになって現れた仲間が引き受けってくれて。立ち上げから1年後には、仲間たちと、宮古、大船渡、石巻の3地域でライブハウスをオープンすることができました。



それが力につながるのか、強さに還元できるのか

Misao 官邸前の抗議に参加されていたとうかがっています。

西片 それまでデモにはあまり参加したことがなかったんですけど、行ってみないとわからないというのがありました。行動して失敗して壁に当たることはたくさんあるんですけど、まず行ってみるというのは、震災以降、純粋に身についたことなのかなという感じで、あまり考えずに、反射的に参加していましたね。

行くと仲間たちがいたりして、ほどなくするとどこかで集まっているんですね。「おお、お疲れ！」って感じで、そこで会話に花が咲いたり。仲間とは行く、行かないの連絡はほとんどなかったんですが、家では一回ありましたね。「これから官邸前に行くけど、どう？」と家内と娘に聞いたら「あ、行きたい」と言うので、一緒に行つたことがあります。デモを行ったら、うちの息子に会つこともあります。

Misao デモの現場でどう思われましたか？

西片 まず、怒りの感情のほうが出しやすいんだなと。これだけの人が怒って集まっているけど、これだけの人が喜んで集まることはあるのかなと思うりましたが、やはり圧倒されたのは、これだけの人たちがここにいるということですね。それが力につながるのか、強さに還元できるのかということを思ったり、続けていくことも大事なんだろうなと思ったし、そのままを分析していたかもしれないですね。

伝えたいことを伝えたい人に明確にできる時間

Misao 西片さんが生きている中で大切にしていることはありますか？

西片 純粋でいたいなと思います。たぶん自分は濁りきっているし、悪いことをたくさんしている中で、今この歳になって色んな経験もしてきて、純粋でいたいなと最近すぐ思います。自分のなかで大切にすること

や、どうあるべきかと思うと、純粋でいられたらしいなと思いますね。

仕事でもいろいろなキャリアを積んできて思うんですよね。若い子たちとも話をする機会があたりしますが、自分が「最近の若い子達は」なんて言葉を使うようなオヤジになるなんて、思っていなかったんですけどね。

Misao 今社会や政治に対しては、どんな感覚を？

西片 人がくっついているようで交わってはいないですよね。人の気持ちの今まで介入して交わりをもてる関係性を、どのくらいの人たちが築いているのかなと思いますね。政治に関してもそんな感じがしますね。冷たいし、伝わらない。生活レベルでも政治レベルでも温かみというか温度を感じられない時代ですね。それがどんどん加速している。

昔は政治にも夢や希望があったような気がするんですよ。自分は地元が新潟なので、田中角栄の話をよく聞くんですね。自分も尊敬しているし。うちの親が陳情で白目に行ったことがあったんですが、角栄はみんなと会ってくれる。話を聞いてくれて「よしかった」と言って、翌年にはトンネルができるみたいなかんじで、どんどん動かしていく人だったと聞いています。

あの雪深いエリアの生活がどんなに辛いかということや、貧しいところからトップになることの難しさをあの人はわかっていた。底辺から上がっていたので、すべての尺度と経験を持っていたんじゃないかなと思うんです。お坊ちゃんの二世議員にはわからんでしょう。でも元をたどると自分たちが政治家を選んでいることにつながってくるので、そこの意識は変えないといけないんじゃないですかね。

Misao 温度を感じられる社会を取り戻すために、大切なことは何だと思いますか？

西片 言いたいことを言って、伝えたいことを伝えて、みんながそうなればいいなと思いますね。あまりしゃべらなくなってきたると思うんですね、みんな。会話しない。みんなスマホいじってばかりだから、まずそれを置いて。せめて2人でいるときにはやめよう、みたいなね。

Misao 最後に、あえて、最近の若い人たちに伝えたいことは？

西片 伝えることを面倒くさがらないで欲しいですね。顔を見合させて相手に伝えることができれば、いいんじゃないかなと思います。不特定多数に向けてのSNSとかTwitterとかで自分の気持ちを言うのではなくて、伝えたい人に伝えたい気持ちを言うことが、大事だと思います。若い人たちには、伝えたいことを伝えたい人に明確にできる時間をもってほしいなと思います。



KLUB COUNTER ACTION MIYAKO

インタビュー全文はこちらでご覧いただけます

<http://coalitionagainstnukes.jp/?p=13183>



西片 明人 (にしかた・あきひと)

1968年生まれ、新潟県出身。SPC peak performance代表。'86年、新宿ロフトでPAエンジニアとしてのキャリアをスタート。'97年に独立。'00年にSPC peak performanceを設立する。これまでHi-STANDARD、BRAHMAN、MONOEYESなど多くのバンドを担当。'11年より「東北ライブハウス大作戦」の作戦本部長を務める。

次回予告 NO NUKES! human chains vol.12 (2020年2月号掲載)

このインタビュー・シリーズでは、ゲストのかたに次のゲストをご紹介いただきます。西片明人さんからは、KOさん(SLANG)をご紹介いただきました。

東北ライブハウス大作戦

WWW.LIVEHOUSE-DAISAKUSEN.COM

PICK OUT!
東日本大震災の被災地の復興に向け、西片明人率いるライブPAチーム「SPC peak performance」が中心となり2011年に立ち上げた、東北三陸沖沿岸地域にライブハウスを建設するプロジェクト。多くの賛同と協力を得て、プロジェクト立ち上げから1年後に宮古、大船渡、石巻にライブハウスを建てる。各ライブハウスは現在も「意志をもって集まれる場所」として、人と人を繋いでいく拠点となるべく運営されている。



石巻BLUE RESISTANCE

東北ライブハウス大作戦 <http://www.livehouse-daisakusen.com/>

編集後記

関西電力役員らが福井県高浜町の元助役から多額の金品を受領していた。これは単なる賄賂問題ではなく、原発をやめられない大きな要因である「原発業界の腐食の構造」と「特異性」が明るみに出た事件といえる。原発マネー還流も指摘されており、関電を追求すると同時に、業界全体を洗い直す必要がある。

国がマトモならエネルギー政策の転換ができるほどの大事件だが、森友・加計事件がフェードアウトしたように政府は火消しを狙ってるのか、助役から自民党国会議員へも金が流れているからなのか、関電国会招致の求めに応じない。令和の新時代に安倍政権も原発産業も必要ない、一刻も早く退場してもらいましょう。